

研究所だより

事務所の移転を総会で報告したが、予定の場所が現在日本労働者協同組合の本部がある鬼子母神に変更になった。目白と池袋の間に位置するので、JR高田馬場駅戸山から1分という便利さは望めない。しかし、事務所のスペースはかなり広くなる。引っ越しは12月になるので、新年を新事務所で迎えることになる。鬼子母神周辺は、大都会東京では珍しく四季折々の風物が楽しめる。私も協同総研にくる前5年間ここに通っていた。一番好きなのは4月初旬である。通り道となっているお寺の桜が満開となり、本当に美しい。鬼子母神の境内では縁日があったり、近くを都電が走っていたり、八百屋、魚屋、肉屋などの小さな商店も銭湯も健在である。日常の仕事で四季を感じるなど皆無であるが、ホッと一息つける空間が広がっているところである。是非、会員の方々には立ち寄って頂きたいと思う。

しかし、この原稿を書いている10月末はそんな気分など微塵も感じられない事務所の中で、協同集会の準備に忙殺されている。企画と関係者のコーディネートに神経をすり減らす毎日である。協同総研の会員が比較的少ない東北である。どんな協同があるのか。先行きの不安が常に先行していたが、出会いのそれぞれがそんな不安をかき消していった。

今回は東北を初めて舞台にすることもあり、「農業」を取り上げる必要が当初から実行委員会での規定路線となっていた。住専問題とWTO体制で揺れる農業を本格的に扱う難しさを感じていたのだが、出会った人たちが実に素晴らしい人たちであった。宮城県田尻町で環境保全型農業に取り組む佐々木さんに宮城の農業事情について教えて頂いた。そこが出発で農協中央会の阿邊参事やJA中田の阿部組合長を知るきっかけとなった。阿部組合長から河北新報社の西川さんをご紹介頂き、さ

らに結城登美雄さんを知り、東北における農業のそこ深さを知ることになった。結城さんがフット天を仰ぎ「農業の再生って誰のためにするんだい。都会で机の上で書いた計画をもってきても役に立たない。どんな過疎になってもそこに住んで暮らしている人がいる。何でなのか。そんな農民の側にたって考えて行きたい。」と言われた言葉と態度が忘れられない。結城さんにはご自身が書かれた新聞記事を多数頂いた。土の匂いや漁村の風を感じるような素晴らしい文章に感激した。田尻の佐々木さんにはその後も相談にのって頂き、さらに農協や生協への働きかけまでやって頂いている。自然食レストラン「おひさまや」を営んでいる鳴原さんには、全体会での報告の他、交流会の食事づくりに協力して頂いている。手製のテーブルクロスを紙で作り、当日のメニューの盛り付けをイメージして、どんなふうにしたら参加者に満足してもらえるかまで考えて頂いている。事務局に加わってくれている人、チケットを預かって協同集会のことを回りに広めてくれる人、差入れを届けてくれる人、「何でこんなに頑張ってもらえるのだろう」「毎日自分の仕事で大変なのに」と、こんな人々の出会いと行動に励まされて、胃が痛くなるような場面も経験するが、負けちゃいけないと元気が出せているのだと思う。仕事だからと思ってやっていたら、こんな気分で終盤を迎えることはできなかったのではないかと考えている。

8月の末から仙台でこの協同集会の事務局を担っている大川昌子さんが「友達の友達はまたこちらでも友達だった」という名言？を教えてくれた。その友達の輪に労働者協同組合が確実に位置付けられる。そんな取組になっている。

(坂林 哲雄)